熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	就任之辞
Author(s)	前田，穰；千田，憲；神山，義次；牛原，虎生；山浦，護
Citation	龍南會雜誌，１２６：[i]-[iv]
Issue date	1908-06-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6133
Right	

Kumamoto University

就任之辭

江湖六月滿城の綠葉久遠に誇りに薫ずる處、俯仰の覆載皆剛放の氣に澄みて、龍南壹千の健兒が血潮に一点の生氣を注ぐもの多きを覺ゆ。歡樂の櫻花盃、あふれて萬朶の雲をおし、凋落の風塵更に紅龕を泥土に委するが如く、世を擧げて時と共に變ずるは自然の勢あり、然り、現實の表を走る一條の潮流は、花を月へと推移しゆくなり。その時代の要求に一致すべく人心の豹變するは蓋し又已むを得ざる事のみ。今や磊塊胸に横はつて自ら持せず、殊更に身を弊衣破帽に包みて風月に嘯きたりし時代は去りぬ。徒らに大語する勿れ呼號す

る勿れ。剛朴の美名に隱れて自己の趣味なき生を掩ふの愚をなすを止めよ。冬のみを知るものは未だ以て終歲の風物を論ずべからざればあり。翻つて思ふに、人は自己の本能より洞察したる人生觀を以て各の所謂善の標準を定むるものあり、武士は武士の常規を有し戲曲は戲曲の道德を備ふ。されば吾人が所謂趣味涵養說の如きも或は一家言なるやの恐れあれども趣味なき人生は實に枯淡なるものなり情念を滅せる隱者は知らず、苟も光明を前途に望むものは、秋冬の幽寂凄凉を知ると共に、春夏の華麗覇氣を辯せざるべからざるなり。さても眞善美は人生の最大條件にして就中美は直ちに趣味に大なる關係を有す。而して先

哲の所謂美は遂に死せざるべからざるものなれども、しかも吾人は更に一歩を進めて美は死するが故に殊に一段の光彩を放つものなりと叫ばんとす。否寧ろ猿猴の月を望まんよりは去つて趣味の購ひやすきに生きよと絶呼せんとす。あゝ天に月あり地に花あり空氣は廣漠として吾人の取つて嚢中のものとすべき趣味は百千、松風徐ろに燃ゆる頰を吹いて快なる哉。吾人不才を以て擧げられ、茲に此の筆硯の任に就かんとす、自らその重きに堪へずして或は期待に背く事多かるべきを恐るゝと雖も又已むを得ざるあり。或は奔馬の如き或は盤上の玉の如き文をなすは自らその人あるべし、吾人は唯諸君の裨補と相俟ちて鞠躬焦慮

の功を收んのみ蕪辭を陳べて就任の辭となす

明治四十二年六月十五日

前田穰
千田憲次
神山義生
牛原虎
山浦護